

衛生工学の心を繋げ

北大でシンポ

衛生工学の心を繋げ。北海道大学の第15回衛生工学シンポジウムが11月8日、9日の2日間にわたり、札幌市の同大工学部で開かれた。シンポジウムには、上下水道界をはじめ各分野で活躍する関係者や学生300名が参加し、最新の知見を交換した。

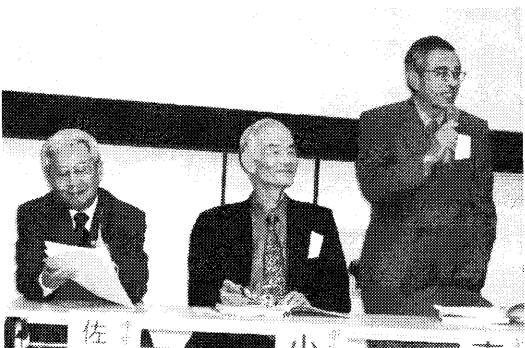
今年の企画セッションは、「地球温暖化防止に向けた国、道、市の取り組み」と課題「膜分離活性汚泥法(MBR)を用いた下廃水処理の最新動向」のほか、次世代を担う若者を視野に「衛生工学の先輩から若い人たちに」を取り上げられ注目された。

「衛生工学の先輩から若い人たちに」では、眞柄泰基特任教授をコーディネーターに、小林三樹氏(1期生)、藤女子大学教授、佐々木氏(13期・日本設計)の5人が、木逸志氏(4期・元神鋼)、多々残されている。人の幸現場でユーザーの条件を聞き、これを最大限に果たすことを最大限に果たすことを誇りと自慢の意見が言える技術的経緯を持ち、自らの役割を果たせと呼びかけた。水処理ビジネス40年の活動を通じて小林氏は、世界には、生きるための基本要素にさえ欠く地域がある。佐々木氏は、「民間企業でも面白い仕事で沢山できる。」

「先輩から若者たちに」 MBRで最新の知見も

と振り返るとともに、「学創立当時の精神であるHealth minded」という言葉の意味を噛みしめ、あらゆる分野にアンテナを張り、好奇心を持ち続けてチャレンジして欲しい」と呼びかけた。

セッションを締めくくったコーディネーターの眞柄氏は、「私たちは衛生工学を学んだが、今は環境工学となっている。皆さんが環境分野の専門家としてどうやって生きていくか。環境にはルールとフォルムという言葉があるが、それに倫理という言葉を加えた。そして、もう一度その意味を考え直していただきたい」と結び、エールを送った。



右から眞柄、小林、佐々木氏

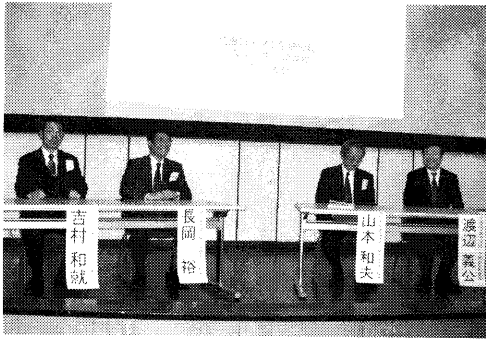


右から小笠原、佐々木、佐藤氏

「君たちは税金で教育されている。肝に銘じよ、道庁では上司から、『お前たちは専門家ではない。様々な意見を集め、集大成するのが役割だ』と言われた。その言葉を忘れない。今は廃棄物資源の有効回収に取り組んでいる」と述べ、変わらぬ衛生工学への情熱を語った。

また、札幌市水道局での長い経験をもつ佐々木氏は、「風通しの良い職場環境で様々な経験ができた」と語り、

コンサルタントとして、長崎のハウステンボスやドバイの人工島などを手がけた佐藤氏は、「衛生工学で学んだ『環境問題』と『人間の視点からの温熱工学』は、自分の設計理念を形成するうえで大変役に立った。どの道を選択するにしても、衛生工学を目指した初心と社会への貢献という思いを忘れないでほしい」と語った。



MBRセッションの講師たち

この中で渡辺教授は「環境問題、汚水からの資源回収が叫ばれている中、MBRはキーテクノロジーとなっている。国際マーケットにのせることが出来れば、日本としての新たなビジネスチャンスにつながる」と、MBRの可能性について語った。

東京大学の山本教授は、次世代の下廃水の再生と高度利用の方法として、集合住宅におけるデイスポーターの普及を視野に「生ゴミ・便所排水・余剰汚泥のメタン発酵を組み込んだ膜分離活性汚泥法による排水廃棄物処理とエネルギー回収」を提案した。

長岡教授は、「処理水質の良さや敷地面積が少ないなど、MBR本来の特徴が理解されていない」として、日本の下水処理場にMBRを普及させるために必要な施策として、①放流先の河川に対応したより積極的な水質基準の設定②水環境が改善されることの便益を正當に評価する試み③MBRの標準的な処理方法としての位置づけなどをあげた。一方、商品のグローバル化と世界的な基準設定の動きがある中、「このままでは日本は単なる装置メーカーになってしまう」と警告を発している吉村氏は、「EUのMBR標準化に積極的に参画するとともに、アジアで主導的な役割を果たすべき。国内でMBRの普及を図ることも大切だと語り、MBR標準化への組織的な取り組みの必要性を訴えた。

セッション

3の「膜分離活性汚泥法(MBR)を用いた下廃水処理の最新動向」では、渡辺義公・北大学院教授の基調講演のあと、山本和夫・東大環境安全研究センター教授、長岡裕・武蔵工大都市工学科教授、吉村和就・グローバルウォータージャパン代表が意見を述べた。

長岡教授は、「処理水質の良さや敷地面積が少ないなど、MBR本来の特徴が理解されていない」として、日本の下水処理場にMBRを普及させるために必要な施策として、①放流先の河川に対応したより積極的な水質基準の設定②水環境が改善されることの便益を正當に評価する試み③MBRの標準的な処理方法としての位置づけなどをあげた。一方、商品のグローバル化と世界的な基準設定の動きがある中、「このままでは日本は単なる装置メーカーになってしまう」と警告を発している吉村氏は、「EUのMBR標準化に積極的に参画するとともに、アジアで主導的な役割を果たすべき。国内でMBRの普及を図ることも大切だと語り、MBR標準化への組織的な取り組みの必要性を訴えた。

中国のボトル飲料水 北京では半分偽物か

中国製品、特に「食の安全」に世界中から注目が集まる中、「中国のボトル水の安全」について中国の複数のマスコミが具体的な数字を挙げ報道している。

①北京市内で販売されているボトル水、半分以上が偽物

京華時報は、北京市内に出回っている飲料水入りの大型ボトルのうち、少なくとも半分は偽物だと業界内でみられていると報じた。

中国では水道水が飲めないため、大型のボトルを購入して給水器に取付け、家庭やオフィスで利用している。同紙によれば2006年の統計で飲料水の大型ボトル販売量は約1億本。しかし、実際の流通量は2億本を超えており、その半分は直接飲めない水道水を入れたり、有名銘柄を偽装した偽物とみられるという。

②大型ボトル飲料水、合格率36%＝大腸菌など基準値超える－中国広東省

新華社電によると、中国広東省工商行政管理局がこのほど、同省で販売されている飲料水入

り大型ボトルの抜き取り検査を実施したところ、合格率はわずか36%にとどまった。大腸菌など微生物が基準値を超えたものが多く、同局は「結果は楽観できない」としている。

③ボトル飲料水、15%が不合格＝細菌濃度などが基準値超過－天津

新華社によると、天津市質量技術監督局がこのほど、天津市内の飲料水メーカー121社を対象に品質検査を行ったところ、不合格率が15.6%と前年より16ポイント縮小したことが分かった。

品質に問題があった商品は、細菌濃度、pH値などのが基準値を超えていた。

このように中国の水問題、簡単に解決できない多くの課題が山積している。

中国政府は多くのマスメディアに対し、段ボール肉まん事件を機に「市民を不安にさせ、社会の混乱を招く恐れのある報道や中国についてマイナスイメージを彷彿される報道、偽食品摘発スクープ記事の報道禁止」を打ち出しており、外国人記者の場合は再入国禁止とも伝えられているので、ここに紹介した記事が、本当の水の姿を映す記事として最初で最後になるかも知れない。

(Y)

定期寄稿です。吉村(Y)